

研究

横川先生と佐伯 (四)

「郷土の研究」に学ぶもの

会 員 山 本 保

横川先生が佐伯(南海部郡を含む)に書き残して下さった、小冊子ながら名著「郷土の研究」によつて、私はすでに、(一)リアス式海岸、(二)山地、(三)台地、(四)三角州について述べましたが、今回は郷土の氣候について紹介いたします。

3. 温和な氣候

よそから来た人は、この地方のなごやかな氣候に驚かない人はありません。

なかには、人からのおだやかなことまで、氣候のせいにするほどです。

ことに春と秋の長いことはどうでしょう。もともと、春はいくぶん暑くなりやすいのですが、五月は快晴が続きます。十一月十二月の温和で快晴の続くのは、特にこの地方の特徴と思われま

すが、この地方の晩秋は、これに当たるのです。

4. 夏・秋

梅雨明けから九月末までは、それでもなかなか暑苦しい日があります。夜は、窓をあけてもすく

には寝つかれず、うちわを扱う手もとが疲れるほどですし、たてこんだお店では、道ばたでおそくまでゆかたがけてすずんでいる人がおられます。

でも天氣のよい日には、東北の海軟風が海岸線に直角に、言いかえると、佐伯湾の中心線に平行に勢いよく吹きつけます。窓が東北側にある家は、多分夏じゆう暑く知らずでしょう。

もとの佐伯中学校(現在、佐伯鶴城高等学校)の本館は、ちようどこれにあたっていました。馬場の松をなだれ落ちる風が涼しいので、放課後い

常るのも忘れて勉強する人もおりました。夜明けの陸軟風もなかなか強く、「あらせ」とよんでいます。沖へ釣りに出かける舟の帆を張ると、一気に大島(注鶴見町)近くまで走るようになります。

暑い日は根氏三十三度にも上りますが、そんな日は、一夏に十日を越えないでしょう。

もつとも、台風が来る二三日前はさすがに夜も曇り蒸し暑さに苦しみます。この台風は、氣候のなごやかなこの地方に、自然の狂感を知らせる唯一のものでも言われましょうか。

昭和十八年の台風では、因茂村(平正村)の大山くすねと、佐伯市の浸水を起こしました。

昭和二十年九月の台風(北湾台風)では、海岸部の学校はすいぶん倒れました。

しかし、風だけなら、台風も「北ごち」つまり東北の風でなければ、そう恐れるにはおよびません。

その証拠には、こちらには防風林が少ないことです。関東平野や鹿児島県では、家が防風林にか

くれて見えないほどです。

この地方では、木立村（佐伯市）と深水津村の田舎音に少しそまつなのがあり、西中津村（鶴見町）の有明では、おすかですが黒松とあこぎ（あこぎ）の美しい防風林があります。開越と蒲戸の砂丘の上の黒松の防風林は、おおかた切り倒されてしまつたほどです。いちばんひどい風で、風速三十メートルと言えましようか。

これは丘陵がちの地形のおかげと思われまふ。一方、山間地方へ小野市前、重岡村、因尾村の夏は、日中もいくぶん涼しいが、夜は特別涼しく、寝苦しい夜は、段とんどありません。深い曉の霧が、だんだん薄れてゆくにつれて、低い丘陵の木立ちがはつきり現われてきますが、霜の葉においた真白い露とともに、山峡の美しい景色の一つです。

冬

冬の風もしぜん弱いようです。

海上はそれでもながながと、大島などの渡海船（定期船など）はすいぶん苦勞します。

ことに、とつぜん高気圧が張り出して来た時は、逃げ遅れた舟は遭難することがあります。しかし、何といつても、なごめかな冬です。

こちらで、急に寒くなり、風が少し吹くと、翌日の新聞には、きへと北陸地方の風雪が大きく出ています。

去年（昭和二十三年）のように、雨の多い冬は別として、かんちくの日だまりにすずめの集まる所などは、かなり寒い日でも、わりあいには太陽の高度の大きいこの地方では、小春日より暖かさを

す。

雪の降る日、一冬に五日を越えることは少なく、十一月末以降降り出した霜も三月の下旬には、だいたい終わるようです。

摂氏五度を越えない寒い日、つまり氷の一日中解けない日が、一冬に十日以上あることはめつたにないでしょう。

新春の静かな冬休みが終わるころ（一月七日ごろ）から二月の二十日ごろまでには、オーバーのほしい日が少しあるとでも申しましようか。防寒の設備のわるい学校では、もつとひどく寒さを感ぜるところもありましようが、真冬でも、野菜が生き生きしているこの地方の冬は、まことに恵まれた気候です。

しかし、小野市村や重岡村それに因尾村の山部あたりはゆくと、少し状態が違います。すなわち、高冷地の性質を帯びるのです。

霜も、海岸地方より約一月から早く、また一月からいおそくまで降ります。ロームの畑には五、六センチある見事な霜柱も立ちますし、雪も三十センチ積るそうです。因尾村の元山部では、そのため表のおいたちもあるく、また霜の分けつも少なく、ちようど玖珠郡のようだそうです。

どうしてこんなに違うのでしょうか。たぶん海から遠いのが、いちばん大きな原因でしょう。

学者の研究によると、海から二十キロへたると大陸性の気候になるそうです。

つぎに神原駅（今の直川駅）から重岡村の方へ上つて汽車に乗った人は、二百メートルを越える高原が第二の原因だと気がつかれることでしょう。

小野市村の水浦の学校へ現在宇目新水南中学校、水浦小(分校)では、火鉢を改良して、一寸のままに使用できる「こたつ」にしていました。だが、寒い土地にふさわしいよい工夫だと思いました。

内陸地方の高原に比べて、海岸地方は、つと暖かです。

沖の黒島も深島は、「ひるう」がはえています。おそらく、これが「ひるう」の北限ではないかと考えられます。

また、はまゆりの群落もあり、亜熱帯に近いといえます。沖の(黒潮へ暖流)の影響もあり、ましようか。元越山が米水津湾に臨む海岸には、野菊の大群落が五、六畝にわたって、冬の真盛りに咲いています。南國的な気分を誘われる風景でしょう。

澄みきつた美しい海岸には、サンゴ礁も点々々々見られます。岸にうち上げられた斑紋のあるサンゴ石灰岩を見た人も多く、さうして、名護屋村へ葛根町の森崎と越田定との間の玲らしい砂浜も、この砕けたものではないかと考えられます。

郷土の気候は、だいたいこんなふうで、いよや米の夏作も、じやがいもや麦の冬作ともによくできる気温に恵まれ、旱害知らずの適度の雨量は、たいてい年々千五百から千七百の間に、冬でも毎月平均五十の降雨があります。

なごやかな気候の恩恵を十分に考えよう。(後略)

(注)

- 1. 海風風 — 海から陸に吹いてくるやわらかい風
- 2. 陸風風 — 陸から海に向かって吹くやわらかい風
- 3. あこぎ — あこぎ、くわ科、わが国の西南地方暖地の木

3. あこぎ — あこぎ、くわ科、わが国の西南地方暖地の海岸地に自生する高木。

4. ひるう — 九州、琉球、小笠原島、台湾の暖地の島や海岸に近い森林中に自生するやしろ科の常緑高木。

5. 浜ゆう — ひるうがな科、浜水綿、副東、南新から以南の西の海岸、砂地にはえる大形の常緑多年生草本、南江州に多い。

6. 黒潮 — 日本列島の太平洋岸と南から東北へ流れる暖流。

7. サンゴ礁 — 死んださんご虫の骨が集まり、積ってできた岩

○竹野浦のピロウ (南高部郡米水津村竹野浦)

ピロウは、ヤシ科に属する亜熱帯植物の代表的なもので、豊後水道沿岸地域に点々と見られます。竹野浦のピロウは、墓地と思われる所に、玉笠竹と混生しており、別に、付近のお宮にもあります。

この地は、浦代湾の海岸線から距離八十間、高段五間くらいの高地ですが、ここは、首埋め立てたところ、ピロウの種子が漂着して、生長したものと云われています。

昭和十八年に天然記念物として県から指定をうけた特色あるピロウです。

○沖黒島の自然林 (米水津町、南江州の境)

○横島のピヤクシン自生地 (米水津村横島)

○大島のアコウ林 (鶴見町、大島加波神社境内)

この三件は、昭和四十八年度県指定天然記念物となり、また、これらの植物群は、豊後水道から瀬戸内海の各島にもないといふ貴重なものです。

ピヤクシンが自生しているのは、瀬戸内海では横島だけ、アコウの場合、一本二本という状態です。育っている所はありますが、林になつていっているのは、殆どないといふ

木ています。いずれも、離島という特殊環境と温暖な気候のために残っている植物群です。

最近の釣りブームで、心ない釣りマニアに盗掘されるのではないかと心配されていますが、おたしたちは、いっまでも大切に守り育てたいものです。

○宇目の野生桐 (宇目町藤河内ノコギリ谷)

わが国でも、桐は永年栽培されてはいますが、宇目の野生桐は、どこから持って来たかが明らかでなく、桐の自生は植物分類学者によつて認められていませんでした。昭和三十一年、本田・前川・北村三博士の現地調査の結果、自生することが認められた貴重なものです。

昭和三十六年、県指定天然記念物。

○宿善寺のナギ (本五村大字井ノ上宿善寺境内)

○五所明神のナギ (佐伯市白坪五所明神社境内)

○洞明寺のナギ (弥生町大字江良洞明寺境内)

ナギは、まき科に属し、チカラシバとも呼びます。常緑の直立高木です。暖かい地方の山中に自生しています。が、また庭木としても一般に栽培されています。佐伯聖南高等学校の庭園にも、若木が沢山あります。前記三つの社寺にあるものは、いずれも高さ十メートル以上で樹令は三百年と越すといわれ、昭和三十六年天然記念物として、県より指定をうけています。

日本の気候を大まかに分けると、夏は雨が多く、冬は空気がかく表日本式気候と、夏は雨が少なく、冬は雪が多い、裏日本式気候になります。これを大まかに見ていくと、特色のある地域にそれぞれ分けられることができます。南海部郡南部から佐伯市北方にいたる区域は、豊後水道沿岸で、南海式気候区に属します。年中黒潮の本流および分流に流れている、暖かい雨の多いところ。です。

九州南部では、六月の初めごろから、つゆにはいります。しかし、東北は北海道の一部では、この時期にはほとんど雨がふりません。それは梅雨前線帯がでないからです。

この現象は、太平洋からくる暖かい空気と、オホーツク海からくる冷たい空気の日とど同じ力をもつた空気が、日本列島の上でぶつかるので、つゆの長雨になるのです。

つゆの雨は、梅雨前線の北、三百キロくらいの幅のところに降ります。つゆには、空気中の水分が多くなり、じめじめしていいやなものです。

でもこの時期に雨がふらないと、都市では水道の水にこまり、水力発電による電力も、思うように得られなくなります。また農家では田植えができずにこまります。つゆは、ふじかくもなく、ながくもない期間が、いちばんのぞましいわけです。つゆの終わりには、雷が鳴って、それがほんとの夏にはいります。

夏になると、太平洋から大陸に向けて、南東の季節風が吹いてきます。

これは、アジア大陸が太陽の力で熱せられ、まわりの大気(空気)がふくれて、軽くなり、大陸に低気圧ができるからです。低気圧とは、大気のおす力が、まわりの大気のおす力より弱いところのことです。

このため、太平洋の方から、大陸に向かへてしめつた風(夏の季節風)が吹きこむのです。このしめつた季節風のため、むし暑い日が続きます。特に佐伯地方は、小笠原高気圧の影響をうけます。

大陸と海とは、太陽によるあたたまり方や冷え方に差があつて、冬になると、大陸が海の方よりよけいに冷え

るので、高気圧が過ぎ、このため海の方へ向かい冷たい風が吹きこんでくるのです。

この冷たい北西の季節風のため、冬は寒く大雪やから風が吹くことになりす。しかし佐伯地方は九州山地の脊梁以内であり、暖かい黒潮上の暖かい空気の影響を受けて、冬は暖かいわけです。

三月も末になると、シベリアから吹いてくる北西の季節風が弱まってきた、春がやってきます。

わたしたちが住んでいる日本列島は、北海道をのぞくと、春・夏・秋・冬の四季がはっきりしている温帯気候にはいります。

それほど暖かい暑さもなく、寒さも感じないです。気候なので、わたしたちは、住みよい国に生きているといつてよいでしょう。

一年中を通じて、高温多湿であり、冬は暖かいのが佐伯地方の特徴です。最寒月の平均気温が六度以上で、日中では十度以上になります。

重岡・小野市の高原盆地は、内陸山地・台地・盆地地域での気候区に属して、瀬戸内海式、南海式、西部山岳式の三気候区の中の中間地帯になります。

建設省九州地方建設局佐伯工事事務所の提供による参考資料を掲げて終ります。

佐伯市

(昭和47年)

1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
気温	7.2	7.3	10.4	15.0	19.6	22.3	26.9	24.5	17.6	12.4	7.2
雨量	77.2	29.5	40.8	180.4	161.0	54.5	44.9	51.1	281.3	14.3	51.2
湿度	68	62	63	67	69	78	78	74	73	71	70

年間最高気温 33.8°C
最低気温 -1.7°C

年間降水量 2,387.7mm
最高日降水量 136.1mm

山口 (本庄村西尾)

(昭和47年)

1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
気温	4.5	5.2	8.1	15.6	20.0	23.0	26.3	26.8	24.0	20.2	15.0
雨量	144.6	161.1	49.7	164.5	145.4	54.5	53.9	38.0	25.3	105.0	85.5
湿度											

年間最高気温 34°C
最低気温 -3°C

年間降水量 1,527mm
最高日降水量 222.9mm

佐賀 (蒲江町)

気象台観測

1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
気温											
雨量	152	248	47	213	272	822	339	70	(欠測)	148	107
湿度											

年間最高気温 不明
最低気温 不明

年間降水量 2,257mm (推定)
最高日降水量 不明 (欠測)

余白に

日本のからくり展」に寄せて

六月二十三日〜二十七日 佐伯文化会館で

これとお隣りになるのは、一か月近く後であるが

からくり・糸の仕掛は、人形や物をいろいろに動かすこと、しかけからくりし、ばいりからくり人形による芝居からくりというふうな中に廻り竹籠をしかけ、機織り交るように見せかける竹籠、まわり竹籠。

からくり人形「ぜんまい仕掛で、ねじをまわせば動くようには造った人形からくりめがね」のネギと称する見せもの、またどこかでおぼろる少年のころ、「二度見たことがある。もう今あれは文化財である。

以上でからくりには、物理学の原理を用い、創意工夫して、手先か器用さを駆使し、動く仕掛にまであげている。今は子供のおもちゃせき反止め、日常生活にいろいろの女器具に用いられている。(用)